

教科「地理歴史」（地理A）における道德教育

1 教科等・単元

教科名（科目名） 地理歴史科（地理A）

単元名（教科書） 「身近な地域の調査」（第一学習社「高等学校改訂版 地理A」）

2 学年 第1学年

3 実施時期 1月

4 道德教育の視点から見た生徒の状況と課題

本校生徒の状況については、「主として他人とのかかわりに関すること」の視点から見ると、人間関係を築く力を育成する指導が重要だと感じている。そしてこの状況は、自分を取り巻く社会や地域への認識に課題を生み出していると考えられる。そこで、地理Aの学習においては、「身近な地域の調査」を展開する際に地域の特質を理解することはもちろんであるが、地域社会を愛し、地域の一員としての自覚を涵養できるような内容を加味することが必要と考える。

5 単元について

（1）題材観

地理Aの構成は世界の様々な地域の特徴や地球規模の課題について学ぶことに力点が置かれており、「身近な地域の調査」については「選択」教材となっている。しかし、「様々な地域の特質」を学習する際にも、「身近な地域の国際化」を取り上げることで生徒の学習内容への理解が進むことから分かるように、生徒を取り巻く身近な地域への理解は地理学習の根幹をなすものと考えられる。また、本校生徒の興味・関心を高める点からも、身近な教材を扱うことによる学習効果が高いと考えられる。

（2）単元の目標

○地理Aとしての目標

- ・身近な地域を知るために地形図の読み方を学び、地理的事象を追究する技能を身に付ける。
- ・地形図を通じて地域の特徴をつかむことで、地理的な見方や考え方を培う。
- ・地域調査の方法を学び、地理的事象を追究する技能を身に付ける。

○道德教育としての目標

地域の成り立ちを理解する中で地域の発展に尽くした先人について理解を深め、地域を愛する態度を涵養することをねらう。

これらのことから、中学校段階の道德の内容項目では、次の項目に関連があるといえる。

地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。4-(8)

6 道德教育のねらいに迫るための手立て

○地形図を使った作業を通じて、地域に暮らしているという実感の喚起をねらう。

- ・通学路を記入させる。
- ・自分の通う学校や自分が使っている最寄りの鉄道の駅を見付ける。

○スライドの上映を通じて、治水のための工夫・努力を知り、先人への尊敬の念の喚起をねらう。

- ・かすみ堤、弁慶杵、三角土手等

○読み物教材を通じて、先人への感謝の念の喚起をねらう。

- ・酒匂川と戦った人々 ～みのかきのすけ蓑笠之介～

7 単元の指導計画

時	主な学習活動	道徳教育のための手立て
第1時	地形図の表現方法について理解する。	
第2時	学校周辺の地形図を基に、地域の特徴を考える。	スライド教材・読み物資料より、先人の偉業について考えさせる。 2-(2) 4-(8) ※
第3時	地域調査の方法に関する技法を理解し、地域調査に必要な事項を考える。	
第4時	具体例を基に、地域調査について理解を深める。	

※中学校段階の道徳教育の内容項目を表す。

8 本時の展開（第2時）

過程	学習活動	教科としての指導内容	道徳教育のための手立て
導入	<ul style="list-style-type: none"> 学校の周辺で水や島に関係する地名を挙げる。 板書された「酒匂川は〇〇川」の〇に何が入るか予想する。 	<ul style="list-style-type: none"> 蛍田、富水など、水と関連の深い地名があることを学習する。 別名「あばれ川」と呼ばれる酒匂川が、頻繁に洪水を起こす川であったことを学習する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の気付きや意見を尊重する。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを使い作業学習を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ①酒匂川・川音川を青色で着色する。 ②学校と自分の使っている最寄り駅を赤丸で囲み、自宅または最寄り駅からの自分の通学路に赤線を引く。 ③足柄平野の土地利用が分かる地図記号を黄色で囲む。 ワークシートの作業③に関して、自分が印を付けた記号を発表する。 スライドを見る。スライドに写っているものは何か、予想する。 読み物資料「酒匂川と戦った人々～<small>みのかさのすけ</small>蓑笠之介～」を読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートの地図を使って作業を行うように指示する。 机間指導を行い、作業内容の再確認が必要な生徒に対して、きめ細かく個別に指導する。 土地利用が水田、果樹園（梨）、工場など水と関係するものであり、足柄平野が別名「水の平野」と呼ばれることを説明する。 三角土手、かすみ堤、弁慶杵など治水のための工夫について説明する。 状況によって可能であれば、指名して生徒に読ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> 地形図を使った作業を通じて、地域に暮らしているという実感を喚起させる。 生徒の気付きや意見を尊重する。 地域の先人が治水のために行った工夫や、地域の先人が払った努力を理解させ、先人への尊敬の念を喚起させる。 治水のために尽くした蓑笠之介の功績を理解し、地域の先人たちへの感謝を喚起させる。
<ul style="list-style-type: none"> ①地域を身近に感じられるよう地形図上での作業学習を工夫する。 ②地域の発展に尽くした人々の辛苦に尊敬と感謝の念がもてるよう読み物教材や写真を工夫する。 			
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートに、本時の振り返りとアンケートを記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の内容について振り返りを行わせる。 	

9 学習指導の実際

授業の終末で、生徒に授業の振り返りを行わせ、ワークシートに、以下の二点について記述させた。

①今日の授業で思ったこと、考えたことを書いてみましょう。

- ・酒匂川の水が生活の支えとなっていることに驚いた。
- ・地元に住んでいるのに何も知らなかった。いろいろ知ることができてよかった。
- ・堤防が途切れている理由が分かってよかった。
- ・過去に頑張った人がいるから今があるのだと思いました。
- ・酒匂川があばれ川だということは知っていたが、さらに詳しく知ることができた。
- ・どういうふうに関心を持っていて、どういう対策を考えていたのかが分かった。

②蓑笠之介についてどう思いましたか？自分の意見を書いて下さい。

- ・足柄平野の人々が今安全に暮らせるのはこの人のおかげだと思った。
- ・人に信頼してもらえているところが凄いと思いました。
- ・三角土手を作り、土手が壊れても修復し続けたところがえらい。
- ・人のために何かをすることはいいことだし、すごいと思った。
- ・地元に住んでいるが、この人のことは知らなかった。
- ・目立たないところで頑張っているところがえらいと思った。
- ・よく分からなかった。

振り返りの①の内容については、一部の生徒は小・中学校で学習していることを予想していた。また、今回の授業で新たに知識を身に付けた生徒が少数ながらも存在した。

しかし、多くの生徒にとって酒匂川の治水の話は初めて知る内容であった。酒匂川の堤防は栢山駅方面からの通学路となっており、またマラソン大会の走路でもあるためスライドを使用した授業は展開しやすかった。生徒の反応は「酒匂川について知ることができた」という形に集約でき、地理としての指導目標は達成できたものとする。

一方、振り返りの②は道徳的内容の定着度を測る質問であったが、「すごい人」という感想に集約される結果となった。蓑笠之介を始めとする人々の努力について一定の理解を生徒が示してくれた結果と判断できるが、また一歩進んで「尊敬の念」、「感謝の念」を記述した生徒は一部にとどまった。

「人物に対する共感」と「自分の行動にひき付ける」ところまで考えが深まったとはいえない状況であり、「郷土の発展に努める」態度を育成するためには、さらに継続した取り組みが必要である。これらは、地理Aとしてはわずか1時間の実践であったための限界と考えている。道徳教育の実践を全体計画の中に計画的に組み込む必要性を強く感じた。



かすみ堤
九十間土手〔足柄大橋の下〕



水防用具
聖牛（せいぎゅう）と蛇籠（じゃかご）



かすみ堤
坂口土手〔城北工業北〕



水防用具
木工沈床（もっこうちんしょう）



三角土手：一部のみ現存



祖師堂：堤の安全を祈願する

酒匂川と闘った方々 ～蓑笠之介(みのかさのすけ)～

皆さんは酒匂川を見て感じる、考えることはありませんか？穏やかに流れる川の水、川越しに望む富士山と箱根の嶺々、松並木…………

酒匂川が今の場所を流れるようになったのは江戸時代の始めの頃でした。この頃、足柄平野を治めていた小田原藩が水田開発のため、大口土手を築いて川の流れを変えたからといわれています。その後100年間あまりは水害もなく安定していたのですが、1707(宝永4)年富士山が大噴火して火山灰が川底に積もった結果、雨ですぐに水位が上がってしまい洪水を起こすようになってしまったのです。

水害を押さえるため関東の幕府領を担当していた大岡忠相(おおおかただすけ)は田中丘隅(たなかきゅうぐ)を派遣し、彼に水害対策をまかせました。田中は大口土手(おおぐちどて)を作り直し「文命堤」(ぶんめいづつみ)と名付けました。1726(享保11)年のことでした。ところが1734(享保19)年の大雨で堤防は簡単に崩れてしまったのです。東側の土手も切れ、皆さんの学校に近い報徳橋あたりの鬼柳村では17人の人が犠牲になりました。

この状況で治水をまかされたのが蓑笠之介(みのかさのすけ)という人でした。蓑は壊れてしまった文命堤を修復するとともに東側の水害対策のため酒匂川と川音川(かわおとがわ)の合流地点に丈夫な堤防を作ることになりました。これが今も残る三角土手です。この頃の様子を記した本には「堤防が決壊して2年続きの冷害でこまり果てて、仕事を求めて違う土地に行ってしまう人がたくさんいる。」と書かれています。蓑はそうした人たちを見て「なんとかしなければ」という思いで20年近くも酒匂川の治水に関わることになります。その後も水害は発生しましたが蓑はあきらめず土手を修復し続けたのです。また修復の際には地元の技術者を使い自分たちで修復ができるようにしていきました。

蓑は堤防を作り替えるだけでなく、「農家貫行」(のうかかんこう)などの本を書き人々に読み聞かせたといえます。その中には人々の暮らしにとって大切なことがいくつも書かれていました。足柄平野に適した作物としてにんにく、さつまいも、米、麦、粟などの作物がよいことや災害復興のための蓄えを村ですること、村役人の自覚を求めることです。また「前地門家筋」(まえちかどやすじ)といわれ、一段低い身分に置かれていた百姓を村で差別することを止めさせ、田畑を持っているものは一人前の百姓として待遇するよう説いています。

このように蓑笠之介は酒匂川の治水にとどまらず、土木、農業を通じて足柄平野の人々の暮らしの安全と向上に努めたのです。

現在酒匂川の水はこの地域の様々な産業を成り立たせるために不可欠なものになっていますが、蓑を始め多くの人々の努力が地域の人々の暮らしを支えているのです。

<参考資料>

「酒匂川を見つめなおしてみませんか」(酒匂川流域の交流ネットワーク会議発行)ほか